

## 『震災復興が語る農山村再生—地域づくりの本質』

稲垣文彦他著／コモンズ

いかにも「技術科学大学」の書評としては似つかわしくない本を紹介しようと思う。

10年前の晩秋、2004年10月23日の夕方だった。突然の激しい揺れ。ちょうどこの場所、大学の研究室でパソコンに向かっていた。パソコンは倒れ、壁掛けの時計が落ちてきた。中越地震である。

もちろん都市部でも被害はあったが、地域の存続が危ぶまれるような壊滅的被害を受けたのは豪雪の農山村であった。あちこちの斜面が崩れ落ち、もともといびつな形の農地は原型を無くした。「復興とはなにか」。農地の復旧、産業の再生、人口の回復、それをもって「復興」と呼ぶのだとすれば、「復興する」ことはもはや不可能かと誰もが思った。諦め放置される農地は増え、折からの不況もあって産業も衰退した。そして何よりも旧山古志村を中心に人口は半減した。過疎化と高齢化の時計の針が20年分、強制的に進められたのである。

10万人を超えるボランティアがやってきた。この地域に明るい未来を描けず流出し続けた次世代に変わって、血縁関係の無い若者たちが大挙して支援したいと押し寄せてきた。地元からも復興支援を担う組織が生まれた。中越復興市民会議である。休職中の30代休学中の20代が立ち上げたその組織は、内外に仲間の輪を広げ、被災集落にくさびを打ち込み、社会の主体と被災地の橋渡しをしていった。行政でも住民でもボランティアでもない「中間支援」組織として、信頼と実績を積み上げていった。

60あまりの被災集落、人口減少と高齢化は明らかに進展した。しかし、元来もっていた「山で暮らす者のたくましさ」を活かし、ヨソモノから気づかされた地域の宝を磨き、地域を開き、誇りを取り戻していく。農家レストランが生まれ、農家民宿が生まれ、アルパカ牧場も生まれた。いまや交流人口は震災前に比べ倍どころか桁違いに増えた。移住者を迎えて限界集落から脱却する「奇跡の集落」も生まれた。人口は減ったが、地域の活力は間違いなく復活どころか、急成長した。間違いなく「復興はした」のである。

中間支援組織が地域と一緒に10年間築きあげてきた復興支援の様々な仕組みは、2011年の東北の被災地へ次々と移植されている。悩みながら、走りながら、考え

---

て行動し続けてきた中間支援者の目線から、「中越復興」を総括し、過疎・人口減少に悩む全国の農村地域へと届けたいメッセージが凝縮された良書である。

社会の課題に気づいた人が「主体的に考え行動すること」の大切さ。結果ばかりを追求するのではなく「プロセスをデザインすること」の大切さ。「たくましさ」を備えた農山村の高齢者と「しなやかさ」を備えた現代の若者たちのコラボレーション。「合意形成ではなく共通認識」。農山村に限らず、閉塞感漂う現代社会のあらゆる場面で役立つ珠玉のメッセージに満ちている。これからのエンジニアにも間違いなく役立つ「知恵」なのではないだろうか。

## 執筆者紹介

### 上村 靖司

機械創造工学専攻教授。専門領域は、雪氷工学、災害復興学。

【書名】 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格  
『震災復興が語る農山村再生：地域づくりの本質』 稲垣文彦ほか著 コモンズ  
2014年 2,376円

[ブックガイド目次へ](#)